

# 海軍

## 私の従軍戦記

鳥取県 松田 俊

戦争の悲惨さを身をもって体験し、かろうじて九死に一生をえて、祖国日本に無事生還した者の一人でございます。家族を残し祖国のために一身をなげうって勇躍戦地におもむき、とおとい一命を捧げられた数多くの戦死者の方、また傷つきご不自由な日々をすごしておられる方、筆舌につくしがたい苦勞をあげたい運よく生還された方、だが今日ややもすると忘れ去られようとしております。戦争を二度と繰り返さないためにも、戦争の苛酷なことを、また身をもって捧げた人々の苦勞をご理解い

ただければと思います、私の戦争体験を申し述べたいと思います。

私は昭和十六年一月十日、帝国海軍の一員として呉海兵団に入団しました。わずか四か月間の教育ではありませんが、それはきびしい訓練でした。教育をおえて三等水兵となり、一等巡洋艦の「古鷹」に乗り組みました。

私は高角砲左方位盤の伝令として勤務しました。艦内勤務は非常にきびしく、すこしでも動作にたるみが来ると、総員制裁として甲板整列で直心棒の洗礼も受けました。

艦内生活で一番不自由なのが飲み水です。からになった通路にある食器洗い用のタンクの水を一滴、二滴のどをうるわしたこともあります。

内地での訓練を終えて昭和十六年十一月三十日、桂島

湾を出港して母島にむかいました。湾内には陸軍部隊の輸送船が集結していました。我々の任務はグアム島攻略部隊の支援であったのです。十二月八日には大東亜戦争開戦、十日にはグアム島への無血上陸がおこなわれました。

十二月二十三日には、ウェーキ島上陸部隊の支援、十七年三月にはラバウルの攻略、五月七、八両日は珊瑚海において敵の機動部隊と戦闘をまじえました。この海戦で味方の特設空母一隻が敵機の爆撃を受け沈没しました。沈みゆく艦から機銃で最後まで応戦していたのでおぼえております。また、この海戦で我空母「翔鶴」も爆撃で飛行甲板がこわれ、飛び立っていた艦載機が着艦不能や、さく敵中燃料がなくなったりして我が艦のそばにつきつきと着水しました。着水機は反転して沈没しましたが、操縦士は全員救助致しました。

私も艦内で足を負傷して入室していたのですが、「敵機来襲、配置につけ」の号令で足をひきずりながら配置につき応戦しました。

八月六日には米軍が反攻を開始し、まずソロモン諸島

のガダルカナル島ツラギ湾へ艦船四十隻をもって進攻してきました。昼間我が航空部隊の爆撃もかっこうされましたが致命傷になりませんので、重巡「鳥海」を旗艦とする第八艦隊に夜襲の命がくだりました。

昭和十七年八月八日重巡「鳥海」「青葉」「加古」「衣笠」「古鷹」、軽巡「天龍」「龍田」「夕張」の以上八隻を以て夜襲が決行されました。昼間は敵の触接機の警戒もあってジグザグ航進をやり、夜間にはいるやただちにツラギの敵艦を目ざして全速力で直行しました。この夜は司令官より「各員持ち場を守って奮闘せよ」との訓示があり、必勝を期して酒が出ました。

いよいよ艦と運命を共にする覚悟はしていましたが、はじめての敵艦との砲撃戦とあって、士気は大いにあがり各自は位置について待機していました。みるとツラギの方角、艦首の前方、海上はるかな水平線上がポーと明るくなっていました。そうこうするとツラギ湾口のサボ島付近にさしかかると敵の哨戒艇がいたようで、魚雷が発射されました。二隊にわかれて湾内に進み敵艦との至近距離に達しました。

午後十時ごろ、とつぜん味方の飛行機によって照明弾が投下され、間髪をいれず我が艦隊の一斉射撃が開始されました。敵艦が暗闇にあかあかと照らし出されて目前にはつきりわかります。敵もあらゆる火器を発砲して応戦してきましたが、全然命中はしません。約三十分間ほどの戦闘で何隻かが沈没または大破し、数隻が火災をおこし海上はあかあかとしていました。味方の被害は軽微でこの作戦は成功裡に終わったのです。

翌日、ショウトランド島に向け航行中、昼間突然「配置につけ」のラッパが鳴り、すわ敵機かと上甲板にあがってみると、右舷はるか横を航行していた二番艦「加古」がみえません。敵の潜水艦の攻撃を受け、魚雷三発が命中し轟沈したのです。すぐカッターをおり乗務員はほとんど各艦に分散して救助しました。大多数の人が流出した重油をかぶってそれは大変な姿でした。

だが敵へ致命的な打撃をあたえることは出来なく、十月にはいるや我が戦隊に第二回の攻撃の命がくだり、昭和十七年十月十一日の夜襲が決行されました。

第一回の作戦同様暗闇を利用して戦闘準備おこたりなく

ツラギ湾へ突入をこころみたわけですが、サボ島沖にさしかかるや突然敵艦から砲撃を受けました。午後十時頃だったとおもいます。我が艦もすかさず応戦はしましたが、敵艦からの照準は正しく全弾命中し、約三十分ほどの戦闘で艦は蜂の巣のようになってしまいました。

私は当時二十五ミリ機銃員として配置についておりましたが、あまりにも被弾がはげしく、スコールでぬれた甲板に腹ばいになっていました。

戦闘が終った時には艦内は目をおおう惨状で、負傷者続出し、水中弾の命中で機械室が浸水し、艦は約十五度の傾斜をつけて停止してしまいました。機銃長から「艦橋のようすをみてこい」といわれ、私は上甲板へ降りてみるとものすごい惨状です。艦橋には機銃の指揮所があり指揮官の植中少尉が大腿部に重傷を負っておられました。大阪出身の私の同年兵も右腕を負傷していました。

士官室前の急造救護所に私は指揮官を背負ってダツダルを降りてみると、驚いたことには負傷者が数十人も横たわり、なかには顔から血を流し、うめき声をあげているさまはこの世の風景とは思われませんでした。私は指

揮官をゆっくりおろして帰り報告致しました。

甲板士官の調査によると、上甲板だけでも六十発以上の被弾があったようです。「敵前であるから水兵は配置についておれ」という命令で、配置につき待機していましたが、艦は真夜中の午前〇時四五分急に沈没を始めました。水兵以外の生存者は早めに外舷をすべりおり、私も戦闘服装（防毒面、鉄帽など）のまま艦外にのがれようとしたが、急に足が足をはさまれて動けなくなりました。

暗闇のことだからどうなっているか全然わからず、艦はずい音をたてて沈没してゆく、足は抜けない、「よし足は折れてもこの場はのがれなくては」と満身の力をこめても抜けない。「もはや万事休す」だと思った瞬間、スボッと抜け、あわてて艦のそとに出た時はもう艦はまよこになり外舷が水平になっていました。

一足外舷が立つと同時に沈没のうず巻きにのみこまれ、もがいても、もがいても浮きあがりません。海水は飲むし「いよいよ俺もこのところで最後か」と思った瞬間、神の助けか、無意識に何やら手に振られてしがみつ

たらようやく海面に浮かびあがりました。みると大きな円材だったので。

助かったという安心感で急につかれをおぼえました。みると近くの海面に駆逐艦の「白雪」が救助に来てくれました。私はまだ元気でしたので救助のカッターまで泳いでゆきつかまったままで駆逐艦にあがることができました。この戦闘で乗員六百人のうち約四百人が救助されました。なにしろ敵前のごとで夜が明けると敵機にやられるので、残念ですが一人残らず救助することが出来なかつたようです。

駆逐艦のカッターをおろし水だると乾パンを積み、運悪く救助が出来なかつた人のためにはなされました。

駆逐艦は全速で帰路につきましたが、あにはからんや夜が明けると敵機の爆撃と潜水艦の魚雷攻撃を受けました。僚艦なしでやられたらそれこそ絶望です。太平洋のもくずとなつてしまいます。でも危機をだつして無事基地に帰ることが出来ました。

基地で旗艦の一番艦、「青葉」に便乗しましたところ、沈没はまぬがれたものの惨状目をおおうばかりです。艦

橋は直撃弾が命中し司令官は戦死され、主砲の二百ミリ砲塔はみるかげもない。方位盤も直撃され、人肉が飛び散って白い内装のカベに点々とふちやくしていました。ひとたびスコールがくれば甲板は赤い血の雨となって流れました。また上甲板全部にうず高く積まれたものがあるとせば、無残にも戦死した兵の死体です。爆風にやられたようで身体は赤くはれあがり、千人針の腹巻きが強く食い込んでいました。

メチャクチャになった主砲の砲塔からは、毎日作業員によって死体が運び出され、連日のように儀仗隊によって水葬がおこなわれました。

十月二十二日、「青葉」に便乗して久しぶりになつかしい呉に帰港することができました。「古鷹」が解散して呉勤務となりました。

その後、電波探信儀講習生として横須賀海軍通信学校に入校しました。教程を終えて昭和十八年十月には海南島の第十六警備隊づきを命ぜられ、海浜団に仮入隊しました。

昭和十九年二月三日、降雪のなかを出発し、門司港で

輸送船「丸多丸」に乗りました。当時内地を一步出ると完全に敵の制空・制海権下であったので、船団も敵の潜水艦の攻撃を警戒して航行するのです。

出港してなにごともなく一週間が経過し台湾も近くなったころ、たしか二月十日だったと思います。午前四時ごろ「ドーン」というにぶい音がして全員起きあがりました。真っ先に護衛の駆逐艦がやられたのです。もの一分もしないうちに「丸多丸」にも魚雷が命中したのです。船はビリビリと振動し、船内電灯は消えて真暗闇になりました。つぎつぎと上甲板にあがってくる者を助けてやりました。したの船倉に落ちた者があるようでしたがこれは救出することが出来ませんでした。

そのうち甲板に海水があがってきたし約十五分で船は棒立ち状態で沈没しました。カッターも脱出した者を満載していましたが、沈没の渦巻で転覆してしまいました。私は運よく一枚の板切れに二、三人でつかまっていた。まもなく白々と夜が明け、みると台湾の東海岸の山々が大きく見えていました。夜が明けたころから風ができて大波になり、波の高さが三、四メートルは

あったようにおぼえています。

やがて水平線上に僚船がみえ、救助にやってきましたが波が高くて救助しにくくなん時間も待っていました。味方の爆雷投下の振動で腹痛がおこり寒さも加わってあと三十分もたないような感じがしました。

午前十時ごろ、六時間ぶりにようやく救助されました。午後には浮いている死体は一人残らず引き揚げられました。夜にはいって花連港に入港し、死者は翌日火葬にふされ、通夜をしました。

昨日のあの元気だった友が今日はと思うと本当に情けなく、家族のことを思い浮かべました。戦争の苛酷なことと従軍したいくたの人々の労苦は、絶対に忘れてはならないと思います。

## 硫黄島戦記

愛知県 宮下 孝雄

特別輸送艦一五七号艦(艦長佐藤大尉、砲術長林大尉)

は、硫黄島上陸作戦・輸送作戦実に七回目にして米機動部隊を発見(昭和十九年十二月十七日午後五時頃)、艦内放送と同時に対空戦闘のラッパがなりました。

硫黄島摺鉢山方向からB29の大編隊が本艦左四五度くらいに来た時、高角砲に「撃ち方始め」の号令がかかり発射しました。高度は約一万メートル、そのため二五ミリ銃は配置についても号令がないため撃つことは出来ません。艦の左右に爆弾の投下で白波が驚くほどでした。

そのB29が去ると同時に艦砲射撃が始まり、米駆逐艦が全速力で南海岸に向けて魚雷を三本発射、同時に水上砲を撃ち始めました。対戦まもなく本艦後部に爆雷が命中、後部は大破、戦死者、負傷者が多数出ました。また高角砲のせん回が出来なくなり、後部群の三連装の機銃で対戦するが、艦の速力も低下し浸水はなはだしく、南海岸沖三百メートルまで近づいた時、こんどはP38ロッキードとグラマンの戦闘機が海面すれすれに来て四方から機銃掃射、これに対し海防艦、駆逐艦の機銃群が応戦、とくにP38ロッキード機は最後まで対戦して去りました。には実に驚きました。